



## ＜「人」のために何ができるか…の気持ちに出会うとき＞

### 「心がほっこりとしたとき」

先日、私が新入大会を終えて帰校した折のことです。校内は既に暗くなっていましたが、保護者の方のお迎えを待っていた部活動帰りの女子生徒が三人、楠の袂の石垣に座っていました。私が通りかかると元気に「こんばんは」。用事を済まして戻ると、「こんばんは：あれ、さつき挨拶しました?」。しばらくして再度、通りかかると「こんばんは：あれ、三回目?」。暗くて顔が見えなかったためにおこったできごとだったのでしようが、元気に挨拶してくれるその声に、私は温かみを感じました。人に会ったら笑顔で元気に挨拶。それだけで人は幸せな気分になります。あのときの三人もそういう生徒でした。「ありがとう」と言いたいですね。

先日、インターネットのサイトを見ていて、こんな記事に出会いました。

子どものゲーム機(DSライト)がヒンジの部分からバツサリと折れて壊れた。大切にしていたものだったので、子どもは泣きまくり…。保障期間も過ぎている機器だったが、メーカーに送ってみた。ユニット交換になるだろうが、交換部分だけが新ピカじゃカッコ悪いと思い、本体カバー全部を替えてもらおうと考えた。見積額を確認した後、無理だとは思ったが、「1500円以下で済むなら直してほしい」と連絡したところ、修理されたゲーム機が戻ってきた。キレイな化粧箱に入れられていてびっくり。しかも本体カバーが交換されていて外観は新品状態。しかも請求額はゼロだった。

…と、ここまでの文面でも少々驚くわけですが、「ビックリ」はまだ続きます。この後を読んでみると…

子どもがゲーム機にベタベタ貼っていたシールがキレイに剥がされて、修理前と同じような状態で「交換された本体カバー」に貼り直してあった。部品交換したピカピカの状態で送り返すのではなく、愛着を持って使っていた状態に戻してくれた。子どもの「オレの!!」という気持ちを大切にしてくれたと感じた。

思わず目頭が熱くなった。こういう仕事は、決してメーカーの幹部でも〇〇長という人でもなく、一社員がやってくれているのだろう。「仕事だから」「こうやれって言われているから」…で、している仕事の出来映えではなかった。それを見て喜ぶ子どもの顔を想像しながらやっているからできる仕事だろう。ゲーム機を大切にしている子どもに対する愛情を感じた。箱を開けた瞬間の子どもの表情を、修理してくれた人に見せたかった。正直言って、このゲーム機をつくっている会社のことはあまり好きではなかったが、見直した。

…という要旨でした。何とも心が和みました。

「ゲーム機を壊してしまった子どもの父親が語る、『仕事だから』『こうやれって言われているから』…で、している仕事の出来映えではなかった」という一文は、仕事をする者として“持っていてほしい「職業観」”を教えてくれるものでした。

第2学年の皆さんは、先日のスタディサポート結果報告会で講師を務めてくれた Benesse の神前達哉さんから「レンガ積み職人」の話があったのを覚えていますか。“教会のレンガを積む”という一つの仕事に対して、「積むように指示されているから」「積んだ量に対してお金がもらえるから」「完成した教会で“多くの人々が救われますように”と願いながら積む」という3人の職人の姿勢が紹介されました。

神前さんは“勉強”をキーワードに“受け身”や“打算”ではダメ”ということを伝えてくれたわけですが、おそらく勉強だけに言えることではないでしょう。

このことは前号に紹介した、今年のノーベル医学・生理学賞受賞者である、本県出身の大村智氏(北里大学特別荣誉教授)に関する記事を読んでも感じることでした。

世の中にはスゴイ人がいっぱいいる。でもスゴイ人は「能力が優れている」のではなく(あるいは「だけではなく」)、“考え方が違う”なのでしょうね。恐らく特別な能力ではないのだと思います。

少なくとも、本当の意味で「周囲から信頼される人」や「まともな評価を受ける人」は、功利主義的(?)、打算的(?)な思考回路しか持ち合わせない者とは一線を画されるはずです。

授業や部活動、あるいはその他の様々な経験を通じて、何を身につけるか、どのように自分を「創っていく」かが大切です。皆さんの毎日は、点数や受験のためにあるものではありません。その先にあるものを見据えてくれることを期待します。手段と目的を見誤らず、“3人目のレンガ職人”であってほしいと思います。

## <南高生に読んでもらいたい一冊>



1989(昭和 64)年1月7日。保護者の皆さんの中には、昭和天皇崩御の日を記憶している人も多いのではないのでしょうか。「日本からコマーシャルが消えた日」と言われた一日で、テレビでは、ほぼ全局で昭和天皇の生涯と「昭和」という時代を映像で延々と迎っていました。

私はこの日、一日中、テレビを観ていたのですが、外の様子は分かりませんが、レンタルビデオ店に客が殺到したという噂も聞いたことがあります。

**あれから27年…かなりの長い時間が経過したのだと改めて感じます。**

今回、紹介する原武史著『昭和天皇実録を読む』(岩波新書、2015)は、崩御から24年の歳月を経て編纂され、昨秋に公開された『昭和天皇実録』(以下、『実録』)をもとにして、「昭和天皇」に焦点を当てた一冊です。

昭和天皇は、明治天皇の嫡孫として1901(明治34)年に誕生しました。20世紀最初の年に生を受けた皇子は「日嗣の御子」と崇められ、大正天皇が病気で公務の遂行が難しくなると、摂政としてその職務を代行しました。

やがて“昭和”。昭和天皇は、即位から最初の20年間を、未曾有の戦争に向かっていく日本の「現人神」として、…そして、終戦から崩御までの40年余りは平和国家・経済大国・日本の「象徴」として異なる時代を歩んだ希有の存在です。その在位期間が、歴代天皇の中で最も長いことも知られています。

『実録』自体が、過去の天皇の記録と同様に、“その事績を顕彰し、後世に伝える”という意図の下に編纂されたことを思えば、内容を全て、そのまま解釈することは正しくはないでしょう。しかし、この本を読むと、時代の中に生きた生身の「昭和天皇」の姿が浮かび上がってくることに興味が湧きます。

実際に『実録』(計61冊)を読むことは、なかなか難しいと思いますが、その点、『実録』に書かれた内容を垣間見るには手頃な一冊…それが『昭和天皇実録を読む』です。

両親や祖父母がまだ若かったころの、すぐそこにある「歴史」の一コマを覗いてみませんか。

## <「ケジメ」と「ゆとり」…挑戦しよう、時間の創造!!>

9月、会議などを通じて、各学年から“19時完全下校”をしっかりとやらせよう”という意見が出ました。このことを受けて、職員一同、「19時完全下校」について襟を正そうと考えています。

**決して新しい取り組みではありません。毎年、緑陽祭準備期間にはこれが厳密に守られるわけですが、時期を過ぎると曖昧になりがちであったことを、ちゃんと守るように気持ちを引き締めたわけです。**

平日・放課後の部活動は2時間半。7校時終了後、清掃を手際よくやって、遅くも16時10分に部活を開始すれば、18時40分で2時間半…。20分あれば、後片付けをして学校を出るまで、かなり余裕が持てるでしょう。それに対して7校時終了後の時間を何となく過ごすと、部活が本格的に始まるのはどうしても16時30分ごろになってしまいます。そこから2時間半を確保しようとするれば終了時間が19時。19時完全下校を実践するには、練習時間を20分ほど削らなければなりません。

一日当たりの差はたった20分です。しかし、これが月～金曜日まで続けば、差は100分。因みに一年間の登校日数は約200日なので、一年間の差は66時間超ということになります。時間に追われる毎日から時間を創造する毎日へ。「ケジメ」をつけて「ゆとり」を創り出す…そんな生活を送ることができるよう、私たちも心がけたいと思います。

**因みに19時完全下校は部活動だけではありません。進路関係の指導を受ける受験生についても19時には下校できるように考えて行動**してください。